

# 万行寺寺報

Mangyoji Jihō

発行 浄土真宗本願寺派 万行寺  
住職 山崎信充  
〒385-0003  
長野県佐久市下平尾4 6 1 - 1  
電話 0267-67-2460

2025(令和7)年

仏暦2568年

11月号

(第170号)

実践運動 総合テーマ『そとつながる ホツがつたわる～結ぶ絆から、広がるご縁へ～』



## 住職 法話

### ただ直ちに仏さまにならせていただける



正信念仏偈に学ぶ  
得至蓮華藏世界  
即証真如法性身  
蓮華藏世界に至ることを得れば、すなわち真如法性の身を証せしむと。

「現代語訳」  
阿弥陀仏の浄土に往生すれば、ただちに真如をさとした身となり、

天親菩薩の『浄土論』に示される、五種の功德を成就する第二の門「大会衆門」に続いて、第三の「宅門」、第四の「屋門」によつて、この句が詠まれています。

第三の門に入るとは、一心にもつぱらその国に生まれたいと願うことにより、奢摩他という寂靜三昧の行を修めようとするから、蓮華藏世界に入ることができるのである。これを第三の宅門に入るといふ。第四の門に入るとは、もつぱら安楽国のすぐれたすが

たを念じ観察することにより、毘婆舍那を修めようとするから、阿弥陀仏の所に到り、さまざまな教えを味わう楽しみを受けることができるのである。これが第四の屋門に入るといふ。「浄土論」にあります。

第一句について、親鸞さまは『唯信鈔文意』に、

「極楽」といふのは阿弥陀仏の安楽浄土のことである。そこではあらゆる楽しみが絶えることなく、苦しみがまじらないのである。その

国を安養といわれる。(中略)『浄土論』には「蓮華藏世界」ともいわれている。「蓮華藏世界」は阿弥陀仏の極楽浄土のことであると

いわれます。ですから、前の句では「獲」、ここでは「得」を使われ、この世を離れ悟りを開かれたという使い分けをされています。

第二句について、親鸞さまは『一念多念証文』に、一実真如といふのはこの上なくすぐれた大いなる涅槃のことである。涅槃とはす

なわち法性である。法性とはすなわち如来である。と述べられ、阿弥陀仏(如来)と同じさとりを開き仏さまとなり、さらに、それは「即証」と直ちに悟りの身にさせていただくといわれるのです。いわゆる二心ない他力の信心になります。

一般に、お葬式では初七日、そして四十九日法要が勤められます。これは中陰といわれて、七日毎に修行をして四十九日法要をもつて仏さまになるといふ教えが広く伝えられていて、私もお勤めをしています。

しかし、「即証」と直ちに仏さまにならせていただく浄土真宗の他力の教えでは中陰の法要は必要ないのです。法要の意味に沿わないものではありますが、一般的に勤められてきたものを否定するのではなく、節目の仏縁を大切にして仏さまの教えにふれる機会を作らせてもらっています。



# 仏教語豆事典

## 阿吽[あうん]

### ものの始まりと終わり

相撲の仕切りは「阿吽の呼吸」を合わせます。吐く息、吸う息を合わせるのです。

社寺の門前のコマイヌさんや、山門の仁王様は、一方が口を開いて「ア」、他方は口を閉じて「ウン」と、阿吽の姿をしています。

サンスクリット語では、最初が「ア」と口を開いて出す音声で「ア」と訳され、最後は「フーン」と口を閉じて出す音声で「吽」と訳されています。

日本のアイウエオで始まる五十音図は、このサンスクリット語の配列にヒントを得て、それに基づいて整理されたものといわれていますから、同じく「ア」で始まり「ン」で終わっているのです。

このように、阿吽は、ものの始まりと終わり、出息入息を示しています。

密教では、阿吽を、根源と帰着、菩提心と涅槃などの象徴としているともいわれているようです。

みなさん、何事にも、阿吽の呼吸が大切ですよ。



## 会うは別れ[あうはわかれ]

### 仏教の無常観がルーツ

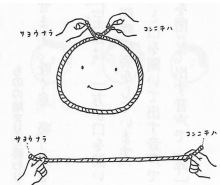
はじめより あふはわかれと 聞きながら  
暁 知らで 人を恋ひける (藤原定家)  
古来より現代に至るまで、この情念をうたったものは数多くあります。

「会うは別れのはじめとは、知らぬ私じゃないけれど」という切ない思いは、すっかり日本人のものになっていますね。

この「会うは別れのはじめ」というのは、『白氏文集』の「合者離之始」を口語訳したのですが、『法華経』の「愛別離苦、是故会者定離」や、『仏遺教経』の「会う者は必ず離ることあり、憂悩を抱くことなかれ」などという、仏教思想をやさしく表現したものです。

「生者必滅、会者定離」といわれるように、生じたものはかならず滅し、会ったものは定めて離れなければならないという、人生の無常を表しています。

三月四月は、卒業、入学、入社、転勤など、人の往来の多いシーズンです。人生のはかなさを悲観的にながめるのではなく、だからこそ、出会いを、人間関係を大切にしていきたいものです。



「くらしの仏教語豆事典」文・辻本敬順 絵・寄藤文平／本願寺出版社刊より

## 編集後記

一年早いです！私事ですが、今月は六十二歳の誕生日でした。◆親鸞さま六十二歳は、関東でのご生活を終え、京都へ帰られた頃だそうです。晩年を過ごされる地に帰られ、様々な執筆を始められます。◆私も何かしら考えなくてはと思索しながら、慌ただしく過ごす日々です。



## 年忌法要表

1周忌	2024(令和 6)年	23回忌	2003(平成15)年
3回忌	2023(令和 5)年	25回忌	2001(平成13)年
7回忌	2019(令和 1)年	27回忌	1999(平成11)年
13回忌	2013(平成25)年	33回忌	1993(平成 5)年
17回忌	2009(平成21)年	50回忌	1976(昭和51)年